

保見団地へのお誘い

— 4 人の方々のライフヒストリーを通して —

齊 藤 尚 文

1 はじめに

「退職記念号」ということなので、それらしいことを書くべきなのだろう。が、1988年に赴任して以来、たくさんの方々にご迷惑をおかけし、たくさんの方々のお世話になって、なんとか努めてきた職場に関しては、これまで書く機会があった [齊藤 2018] [齊藤 2021] し、わたし自身のライフヒストリーについてもたっぷり語った [中尾・齊藤 2018] [中尾・齊藤 2019] [中尾・齊藤 2021] [中尾・黒川・齊藤 2022] ので、ここでは、退職後も関わることになる保見団地プロジェクトについて記す。「これからも一緒に保見団地に関わってね」とお誘いすることが、本稿の目的である。

とはいっても、ライフヒストリーらしきことになにも触れないわけにはいけないので、そこから始める。

わたしには、座右の銘がふたつある。「座右の銘」といっても自分で発明したのだが…

① 人の命は地球より重く、アリンこと同じくらい軽い

「なんのこっちゃ？」と思われるだろうから、ちょっと説明する。わたしは中学生の頃、「生きる理由もわからないまま生きていいんだろうか？」と悩んだ。今思い返すと、かなり重いうつ状態になっていたのだら

う。当時は、「鬱」や「発達障害」など知られていなかったもので、わけもわからぬまま家族に毎日「死にたい」と言っていた。ある日突然、「アリだっ
て生きている理由など知らぬまま元気に動き回っているんだから、生きる
理由なんてわからなくていいんだ」と思いつき、気持ちが楽になった。ア
リには失礼な話だが…

② 背水の陣を敷くと間違える

これは、中学校の時から高校を卒業するまで、学生運動に関わった経験
にもとづくものだ。「こうでなきゃだめ」「こうするしかない」と思い詰め
たために、自分も周りの人々も傷つけることになってしまった、と思って、
気軽に過ごそうと心掛けている。気楽に過ごせないことの方がはるかに多
いのだが…

2 保見団地プロジェクト

背水の陣を敷いていたつもりはないのだが、2022年からは、保見団地
に勉強部屋を持つことになってしまいそうだ。2年前までは、南の島の海
岸へ移住するつもりだったのだが、保見団地プロジェクトのせいで、予定
がすっかりくるってしまった。

保見団地プロジェクトは、「休眠預金」を使う最初の助成金事業〔金子
2020〕〔大阪ボランティア協会 2020〕のひとつである。この地域の資金
提供団体である「中部圏地域創造ファンド」が公募した「NPOによる協働・
連携構築事業」は、4つの課題実行団体と1つのコーディネート団体がチ
ームを組んで応募することになっていた。チームの助成金額上限は年に1千
万円で3年間継続する。保見団地プロジェクトの場合、「愛知県県営住宅
自治会連絡協議会」がコーディネート団体、「県営保見自治区」「外国人と
の共生を考える会」「NPO法人トルシーダ」そして「保見プロジェクト(中
京大学)」が課題実行団体である〔中部圏地域創造ファンド 2021〕。幸い
採択され、2020年4月に事業がスタートした。自治組織・NPO・教育機
関がひとつのチームに含まれるという多様性が、保見団地プロジェクトの

特徴である。また、資金提供団体である中部圏地域創造ファンドの支援が手厚いことも大きな特徴である。多様性に富んだチームがチームとしての営みを続けることができるのは、中部圏地域創造ファンドの支援のおかげである。

「中京大学」といっても、内実はわたしのゼミ生が中心の任意団体で、NPO 法人を想定していると思われる助成金事業の実行団体の体裁を整えるのには、かなり手間がかかった。（例えば、学生に「代表」になってもらう予定だったが、申請書には実印が必要で、わたしが代表になるしかなかった。）

ただ、中京大学の行動計画は、2019 年度秋学期に「国際理解教育Ⅱ」という科目で取り組んだ内閣府・豊田市・中京大学の3者連携による規制緩和事業で、履修者たちが「多文化共生」に関して、内閣府参事官・豊田市長・中京大学理事の前で発表した提言である〔中京大学 2019a〕〔中京大学 2019b〕〔中京大学 2020〕。その面では、中京大学にとっては、3者連携事業の発展型ということになる。また、保見団地プロジェクト自体は、2019 年 11 月に始まった「保見アートプロジェクト」〔保見アートプロジェクト Facebook〕の発展型という面があり、このプロジェクトには、「国際理解教育Ⅱ」の履修者も参加させていただいたので、この点でも継続性が強い。

わたしは学生・院生とともに、1990 年代末から「豊田市外国人医療支援グループ」のメンバーとして、またトルシーダのお手伝いとして、保見団地に関わってきてはいる〔斉藤 2008〕〔斉藤他<編> 2011〕。が、保見団地に没入したことはなかった。保見団地に関わることが、日々の暮らしにこれほど大きな変化をもたらすとは、予想していなかった。

3 ライフヒストリー

保見団地にかかわる 4 人の方のライフヒストリーを読み比べるのが、本稿の主体である。といっても、ライフヒストリーの聞き取りは主体的に選

択した事業とは言えない。中京大学は、「高齢者サロン」「子ども食堂」等を助成金事業の事業計画にもとづいて実施しているが、「フィールドワーク」「調査」が、メインの事業である。「高齢者サロン」「子ども食堂」[中京大学現代社会学部 2021][新三河タイムス 2020]等に関しては、詳細な記録をつけており、これは「事業報告」としてまとめつつある。ちなみに、2020年にこの事業に関わった学生は延べ729人で、十分に誇りうる実績だと思う。しかし、事業記録だけでは、「調査」としては弱い。困っていたところに、「ライフヒストリーを記録したら？」という助言をチームメンバーからいただき、飛びついた。これは、文化人類学を専攻する者にとって、得意分野だし、ゼミ生の教育にもなる。

ここに記すライフヒストリーの語り手は、2021年3月まで県営保見自治区の区長だった前潟昇さん、保見団地にお住いで自治区役員の藤田パウロさんと久保田恵子さん、そして保見団地にお住まいではないが、トルシーダのスタッフとして保見団地で活躍している山口ジェシカ理絵さんである。前潟さんは日本国籍で日本育ち、他のお三方はいわる「日系人」である。みなさん世代が異なる。出身の違いや世代の違いが、日本での経験にどのような影響を与えているかを知りたくて、意図的に選ばせていただいた。なお、4人とも保見プロジェクト（中京大学）の報告書にライフヒストリーを掲載することを、ご承諾くださっている。

4 日系人とライフヒストリー：先行研究

日系人のライフヒストリーは膨大である。

ライフヒストリー法は、シカゴ学派による移民研究「ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド移民」をその源泉としている [田中 2021: 113]

ということなので、もともと「移民」研究とライフヒストリーとは、ひと

つながりのものなのかもしれない。移民研究においてライフヒストリーが重視されるのは、移民が国籍や母語等でカテゴライズしがたいので、あるいはカテゴライズするのは危険なので、ひとりひとりの歴史を記述することから始めるしかないからであろう。野中は、「国籍」や「血統」に縛られて「日系ブラジル人」の多様性が見えなくなっている」と指摘した〔野中 2020:3〕。

ブラジルの日系人の研究自体が膨大である。代表的なものとしては、前山隆の一連の著作（書評としては、〔森 1998〕〔岸和田 2011〕がある）、〔松岡 2004〕〔細川 2008〕をあげることができよう。この他にも、サンパウロ人文科学研究所が調査研究を継続している。最近の成果は、〔サンパウロ人文科学研究所 2021〕である。ブラジルの日系社会を調査したこの報告書が興味深いのは、日系社会がブラジル各地でコミュニティを形成し、コミュニティの活動が現在も継続しているだけでなく、日系社会外への地域貢献もしている、という点である。一方、1990年代から2000年代の初めにかけて、保見団地で精力的に調査し論文を発表し続けた都築は、

日系人は、ネットワークはつくって利用するが、固定的な組織は積極的には作らない〔都築 1998: 97〕

と指摘した。ブラジルと日本でこのような違いが生じていることを、日本で多文化共生に関わる人たちは意識しておくべきだろう。

なお、都築はこの論文等で、1980年代末以降の保見団地での出来事を丁寧に記述しただけでなく、〔都築 1999〕では、「外国人受け入れの責任主体」を愛知県豊田市、群馬県大泉町、静岡県浜松市で比較した。そして、大泉町を行政主導型、浜松市を民間主導型、豊田市を自治区主導・行政放置型と名づけた。受け入れ方が自治体によって大きく異なるという指摘は重要である。（保見団地プロジェクトには、豊田市役所もしっかりとかかわってくださっている。）

日系人のライフヒストリーを主題とした論文には、2つの特徴がある。ひとつは、日本語教室など、日系人支援の場にコミットしている書き手が多いこと。もうひとつは、ライフヒストリーの語り手を匿名にしている論文が多いことである。

ともに活動しながらフィールドワークをする研究があたりまえになったことは、感慨深い。豊田市外国人医療支援グループを立ち上げて間もないころは、「調査させてほしい」という申し入れを何回か受けた。わたしたちは、「3か月は活動に参加し、現場での体験を積んでからなにをどう調査するか相談しましょう」とお答えすることにしていた。そして、参加してくださった方は皆無だった。「指導教員に相談したら、『もっと楽に調査できるところがあるから参加しなくてよい』と言われた」という応答もあって、「活動に参加しなければよい研究ができないことを証明してやろう」と発奮したことを覚えている。わたし自身は、残念ながら証明できなかったが、看護師・文化人類学者としてグループの活動を主導してきた大谷がかりは、実践を活かした論文を書き続けている [大谷 2007][大谷 2010][大谷 2012]。

活動にコミットすることと、ライフヒストリーの語り手を匿名にすることとは、わたしには、整合しないように思える。ともに活動に関わってきたからこそ語ってくださったたいせつなライフヒストリーの語り手を、なぜ匿名にするのだろうか？もちろん、プライバシーを守り、安全に日々の暮らしを続けていただくために匿名にしなければならない、という場合もあるだろう。しかし、活動に加わることで崩した「調査研究」と「実践」との壁を、論文を書く段階になって再び築いてしまっているように感じられるものもある。これに加えて、調査地自体を匿名や仮名にしている論文もある。都築は、保見団地における重要な一連の論考のタイトルを、一貫して「豊田市H団地」としていた。他にも「市民の研究活動」という特集の中で、日系ブラジル人のライフヒストリーとアイデンティティについて記した [堀端 1997] や、ブラジルにおける日本語学校の学習者の多様

化について記した〔中澤 2018〕は、ライフヒストリーの語り手だけでなく、自治体名も匿名にしている。（今でもちゃんと文化人類学の勉強をしているんだぜ、ということを示すために付け加えれば、スロヴァキアの NGO 活動について記した〔神原 2021〕も（調査地を示した地図でも）自治体名を匿名にしている。）

一方、埼玉県川口市にある芝園団地での多文化共生活動を描いた岡崎は、

そうした人となりが多少なりとも分かれば、「不気味な隣人」の印象が変わるのではないか。そう考えて、毎月発行する自治会広報紙の中で、役員の人物紹介を試みることにした。

これは、社会心理学における「拡張接触仮説」に基づいた取り組みである。「拡張接触仮説」とは、「内集団成員に外集団に所属する友人がいると『知ること』や内集団と外集団の人々が友好的に接触する様子を『見聞きすること』でも、集団間の態度が改善される」というものである。この仮説からは、例えば、外国出身役員の活躍ぶりを紹介すれば、日本人の外国人に対する印象が改善する可能性が示唆される。〔岡崎 2021:9〕

と記している。他にも、ロサンゼルスにある国立日系米人博物館は、「インタビュー ディスカバー・ニッケイ」で各地の日系人を紹介している〔Japanese American National Museum ホームページ〕し、「自分の力で未来を切り開く 外国ルーツの若者を応援するコミュニティ」glolab（グローバルラボ）は、「外国をルーツに持ち、力強く自らの人生を切り開いてきた人たちが語る「ライフストーリー」」を紹介する glolab Magazine を出している〔glolab ホームページ〕。

岡崎の論文は読んでいなかったし、「拡張接触仮説」ということばも知らなかったが、保見団地に関わる方々からのライフヒストリーの聞き取りは、最初から、保見団地に暮らす方々が互いに知り合い語り合う機会を増

やりたい、と願ってのことであった。前潟さんのライフヒストリーについては、聞き取り当時、前潟さんが県営保見自治区長だったこともあり、南山大学大学院の湯屋さんにきれいな年表を作ってもらい、これを同僚の亀井さんにきれいに印刷してもらって、パネルを作成した。そして、県営保見集会所で開催した「高齢者サロン」で展示し、参加者の方々から自己紹介を兼ねて、これまで経験されたことを語っていただいたりした。ただ、このやり方は、パネルを作って説明した効果はあったが、参加者がつらい過去を思い出してしまうことにもなったので、現在は、やめている。

5 前潟さん・藤田さん・久保田さん・山口さん

ここでは、「保見プロジェクト(中京大学)報告書」に掲載する4人の方々のライフヒストリーを要約する。

5-1 前潟 昇さん

前潟さんは1937年に鹿児島県串木野町(現在の「いちき串木野市」)で生まれた。小学校1年の時に、のちに妻になる方の父の勧めで、長崎県佐々町(さざちょう)の炭坑で父が働くことになり、引っ越した。前潟さんは、現在の清峰高等学校を卒業して、佐々町の芳野浦(よしのうら)炭坑で働いた。(炭鉱町での暮らし、炭鉱の仕事について詳しく語っていただいた。とてもおもしろいのだが、ここでは省略する。)

数年で炭鉱が不景気になり、友人4人と東京都大田区の工場ではテレビの部品を作る仕事についた。1年ちょっとしてから、弟の誘いで大阪の町工場へ移った。28歳で結婚。

大阪に行って10年ほどで景気が悪くなった。一方、トヨタ自動車は隆盛になっていく頃で、地方から働き手が集まってきた。前潟さんも姉の夫の勧めで豊田市の市営住宅に引っ越した。55歳の時、24年間務めた工場を辞め、軽急便の配送の仕事 시작했다。1年半ほどしてから東部陸運に移った。

1976年ごろ、次男が幼稚園に入る年に、県営保見住宅に引っ越した（保見団地の入居開始は、1975年である）。県営保見住宅には、九州出身の人が多かった。入居して5年もしないうちに、県営保見自治区の役員になった。1989年ごろから区長になった。当時は、駐車場は来客用で居住者は駐車場を借りることがなかなかできず、路上駐車が多かった。県に嘆願書を出し、何年かかけて駐車スペースを増やすことを認めてもらい、車庫証明を取れるようになった。6年間区長をした後、老人会の会長などをした。区長を辞めたころから日系人が入居し始めた。日本人の若い入居者は出て行ってしまい、自治区に5つあった子ども会がなくなった。

8年前に、「もう1度区長になってほしい」という声が高まり、2回目の区長になった。放火とか不法投棄とか問題はいろいろあってたいへんだが、「よくしていかねばならない」「みなさんの要望に応えねばならない」と思って、年齢的には厳しいが続けている。

5-2 藤田 パウロさん

1944年にサンパウロから500キロくらい離れたまちで生まれ、すぐにサンパウロから50キロのモジ・ダス・クルーズスへ引っ越した。父がここでクリーニング店を開店した。父は岡山出身で10歳くらいの時に親に連れられてブラジルに移住した。母とはブラジルで出会った。

ブラジル学校では、「日本語を話すのをやめてください」と先生に言われた。午前中はブラジル学校、午後は日本人会が作った日本語学校へ通った。ブラジルの小学校は4年制だった。小学校を卒業して進学したが、行かなくなった。日本語学校も行かなくなった。昼間、知り合いの店で働いて、夜間学校に通った。親戚が指輪などを作っていたので、そこで働くようになり、その後、民芸品を売っていた叔父と仕事をした。それから金細工の店を始めた。職人が5人くらい働いていた。妻とは30歳くらいの時に天理教会で知り合った。（ブラジル日系人社会の天理教については、[山田 2014a] を参照）

IBM で働いていた妻の妹の夫が、「日本へ行こう」と言った。幸い会社の権利を買ってくれる人がいたので、1990年に日本に来た。ブラジルでは日本人と言われたのに、日本に来たらブラジル人と言われてショックだった。

小島プレスがいくつも保見の公団（現在のUR）の部屋を借りて社宅にしている、そこに5人で住んだ。最初は、家族を連れてくることも、電話をつけることも、認めてもらえなかった。1年後に会社が「家族を呼び寄せていい」と言ったので、家族と県営保見住宅に入った。（都築は、「日系人は公団の社宅へ入居していたが、この時期から家族で県営住宅へ移動するものが顕著となり（1990年12月頃より県営への移動開始、1991年8月現在で約34世帯が居住）」[都築 1998:92]と記している。）会社が保証人になってくれた。「(仕事を)続けるつもりなら正社員になってください。そうでないなら辞めてください」と言われたので、正社員になり「永住者」のパスポートを取得した。

「日本へ行ってちょっと頑張れば家を1軒買える」と伯父に言われた。実際、5年でカンピーナスにマンションを買うことができた。

仕事を始めた当初は、「あんなところは日系さんにやらせればいいんだ」という雰囲気だったし、上司には「てめえ」と言われた。でも、その人のおかげで仕事ができるようになった。

小島会長は、「日本名があるなら日本名を使うように」と言った。が、いやなので正式の名前で呼んでもらうように頼み、「パウロ」に戻してもらった。

60歳で退職し、5年間別の会社で仕事を続けた。

日本に来たら、ブラジルで使っていた日本語と違うことがわかった。ブラジルでは、ポルトガル語が混ざった日本語を話していた。（「コロニア語」だと推定される。コロニア語については、[中東 2018] 参照。藤田さんの語りからは、日本人の集団入植地を「植民地」と呼ぶなど、この年代ならではの経験がうかがえる。「植民地」については、[wikipedia 「日系ブ

ラジル人]] [高橋 2008:73] 参照)

日本に来てからは、家ではポルトガル語を使う。保見ヶ丘国際交流センター（保見団地で活動する NPO のひとつ。藤田さんは副理事長をつとめている。[保見ヶ丘国際交流センター ホームページ])の通訳をやり始め、ボランティアで、病院や市役所へ付き添っていった。そんなことをやるようになって、日本の日本語がわかるようになっていった。会社を辞めてからは、ケアセンター（保見団地中心部の買い物施設「フォックススマート」の1階にあり、訪問介護と児童デイサービスを実施している。[高齢者生協 ケアセンターほみ ホームページ])で働いている。記録をつけなければいけない。スペイン語、ポルトガル語、日本語のサンプルがある。今は慣れて仕事は楽しい。

退職後、胃がんになって手術した。完治して2014年に3か月ブラジルへ行った。

長男と同居し、次男と娘は結婚して瀬戸に住んでいる。ふたりとも近くに家を買った。孫が5人いる。娘は中学を出てからブラジルへ行き、高校を卒業してカンピーナスにある大学に進学した。妻もブラジルに行っていた。が、大学1年の時に、わしががんだとわかって、中退して戻ってきた。

いつ帰れるかな？ マンションはあるし、年金ももらっている。ブラジルへ帰ってなにをするかが問題。生活するのは日本の方がいい。

5-3 久保田 正恵さん

1967年にリオデジャネイロの田舎の方で生まれた。両親は北海道の南美幌で炭鉱の仕事をしていたが、仕事がなくなったので、ブラジルに移住した。60年前、母たちが20代の時のこと。5人家族でなければブラジルへ渡れなかったので、両親、わたしの兄と姉、それにおじさんが一緒だった（第2次世界大戦後のブラジルへの移民については、[国立国会図書館 2009]、北海道からブラジルへの移民については [中村 2008] 参照）。ブラジルで農業を始めたが農薬が体に合わなかったので、まちへ出た。貧乏

で、9歳までテレビがなかった。

22年間ブラジルにいた。まちに出る前は、日本人だらけで、お店の人も日本語を覚えていた。高校を卒業し、青木建設〔宮本 2014〕のホテルで働いた。最初は秘書、のちに外貨交換担当になった。ポルトガル語と日本語を使って仕事をした。日本人観光客もたくさん来た。皇族も来た。やくざの刺青がブラジル人とは違うのでびっくりした。

1989年にひとりで日本へ来た。知り合いが「日本で2年働けば金持ちになる」と言ったから。日本に着いて、おばあちゃんに電話したら、日本語が話せるのでびっくりしていた。父が、「家の中では日本語で話す」と書いた紙を貼っていた。ブラジルでは日本語学校にも通い、日本人会館で開かれたキャンプとか運動会に参加していた。

8人兄弟で、わたしの後に、兄2人が日本に来た。ひとりには豊田、もうひとりには稲沢にいる。妹は1998年くらいに日本に来た。ブラジルでは兄弟皆が日本語学校に通い、父は、兄と姉には厳しく日本語を教えた。北海道のおばあちゃんは、船便で『リボン』などを送ってくれた。

最初は滋賀県の電化製品を作る工場で働いた。ラインではなかった。その後、豊橋、岐阜と転々とした。給料がよいとか、知人に誘われたとかで、勤め先を変える人は多い。

1993年くらいに豊田に来て、藤岡（2005年に豊田市と合併）のアイシンで派遣会社の通訳をした。四郷のアパートに住んでいた。家族の分までビザの手続きをしたり、病院へ連れて行ったりもした。仕事以外の手伝いでは、お金をくれようとする人もいるが、わたしは一切受け取らない。アパートが狭いので、1995年に県営保見団地に引っ越した。

2000年に娘を出産した後、加茂病院で通訳をした。2003年に息子を出産した後から、東保見こども園に勤務している。わたしは高校で小学校1年から4年までの教員の資格を取った。学童で、日本語とポルトガル語を子どもたちに教えた。今は3歳児担当で、なるべく日本語で話すようにしている。家ではポルトガル語だが、日本の小学校に入学するのだから。

毎日忙しくて、娘と息子にポルトガル語を教えなかったのは、失敗だった。娘の彼氏はブラジル人で、日本語もできる人だけど、ポルトガル語で話している。彼へのメールはポルトガル語。ポルトガル語をだいじにしてほしい。娘の帰化を申請している。いずれは息子も。

父は1998年にブラジルで亡くなり、母は2000年に日本に戻った。40年ぶりにおばあちゃんと北海道で再会した。母は去年亡くなった。本人の希望で散骨にした。弟は日本で亡くなり、ブラジルに持っていくまで骨をお寺に預けていた。家族がいないブラジル人はどうするか、心配。日本は死ぬとお金がかかるね。

今、北海道にはおばさんたちがいる。ブラジルにはいとこがふたりしかいない。

今年で母子手当がなくなるけど、そのおかげで子どもを育てられた。とても感謝している。

自治区の役員になったのは5、6年前。それまではまったく興味がなかった。棟長会で誘われた。

うちは日系人だけじゃなく、外国人の血も流れている。元旦那が日系3世、おじいちゃんが日系2世、おばあちゃんがブラジル。日本人でも水色の目とか、緑の目とか、たくさんいた。

5-4 山口 ジェシカ 理絵さん

1993年、長野県安曇野市で生まれた。山梨と高知出身の祖父母は、「船の時代」にブラジルへ渡った。父母はブラジルの生長の家（ブラジルの生長の家については、[山田 2014b] [樋口 1998] 参照）で出会った。わたしはクリスチャン。両親は、1990年に日本に来た。生まれた後、あちこちへ引っ越した。2歳か4歳で岐阜に引っ越して、保育園へ通った記憶がある。父母は日本語を使っていて、時々ポルトガル語も話した。

4歳で瀬戸市に引っ越した。引っ越しはブラジル人の中でめっちゃあるよ。お金がいいとか、親戚や知り合いがいるとかで引っ越す。瀬戸市でも

保育園に通ったけど、卒園前にブラジルに行った。おじいちゃんとおばあちゃんのこともあったし、わたしが病気になったので。両親はブラジルなら病気の説明ができる。

6歳の時、10月にブラジルへ行って、幼稚園に通って、周りが何を言っているか、まったくわからなかった。小学校に入ったら、たまたま日系人の先生で、すごいラッキーだった。パラナ州のマリンガというまちの公立学校だったので、みんなブラジル人。

父はすぐ日本へ戻り、わたしは母と祖父母と暮らした。家では全部ポルトガル語だった。祖父母は日本人だが、ポルトガル語を話していた。

7年生（ブラジルの教育制度については、[静岡県ホームページ「ブラジルの教育制度」]を参照）の時、「そろそろ戻ろうか」ってなって、また父と暮らすようになった。瀬戸に住んで豊田市の浄水にあったEAS（ブラジル人学校。2019年、倉橋学園と合併。現在は、学校のひとつが保見団地のすぐそばにある。[Escola Alegria de Saber ホームページ]参照）へ通った。ブラジル人はみんな「3年後にはブラジルに帰る」って言う。だから、ブラジル人学校へ通った。

家ではポルトガル語のまま。日本語はブラジルにいた間に忘れた。両親に、「日本語の勉強をするために保見団地に引っ越したい」と言った。保見団地に憧れがあった。2010年に保見団地に引っ越した。2009年に保見団地のトルシーダにちょこっと行った。トルシーダには当時、生徒がたくさんいたので、「ひとりやめたら次はわたしを入れてね」と湯原先生に頼んだ。日本語を勉強することに興味があったというより、友達とわいわいしたかった。家では日本語の勉強はしていない。アニメとか漫画は見ていた。ブラジルにいた時から、ワンピースを見ていた。アニメは字幕、漫画は日本語でがんばってた。ひらがなを2日で覚えて「さあ読もう」と思ったら、読めなくてがっかりした。絵で意味を想像していた。日本に来たらワンピースの作者の尾田栄一郎に会えると思っていた。

2009年にトルシーダに入って数ヶ月通って、あきらめて、2011年に

EASを卒業して、あまり日本語できなくて、「仕事どうしよう」「大学どうしよう」と思っていた。2008年にリーマンショックがあったし、津波もあったし、両親はブラジルに帰るかどうかわかっていた。

ふたりの友達が大学進学を希望し、ふたりともずっと大学に入った。わたしも大学に進学したかったが、どうしたらいいかわからなかった。とりあえず日本語を勉強しようと思って2012年からまたトルシーダに入った。目標を聞かれて、「N1（日本語能力試験の最高レベル）を取りたい」と言って、勉強した。N3は一発合格。次の半年でN2。めっちゃがんばった。湯原先生が毎日、新聞とか雑誌を持ってきて、それを読んで、なにが書いてあるかを書き出したりして、勉強した。半年後のN1は不合格、1年後に合格。トルシーダには年齢制限がある。それで、2012年から2年後に卒業。19歳だった気がする。

トルシーダに通いながら2012年10月くらいにブラジルの通信制大学に入った（ブラジルの通信制大学に関しては、[小町 2013] 参照）。コンビニでバイトしながら、トルシーダに行ったりとか。2012年はフォックスとデリカ（工場）でバイト。2013年くらいかなあ、コンビニのバイトを始めたのは、日本語を使うから、チャレンジだった。

通信制の大学は、2年間マネジメントの勉強。単位をとれなくて、終わったのは2015年2月だったと思う。ブラジルに帰ってから栄養士の大学に行く予定だった。栄養士になってブラジルに自分の店を持つのが夢で、そのために経営を先に勉強しようと思った。けど、結局ブラジルに帰らなかった。マネジメントの大学が終わらないうちに、2015年1月から、日本で役に立つものと思って、語学を勉強した。同じ、通信制で、ポルトガル語と英語。この大学は4年間で、2019年に卒業した。

2017年にフォックスの3階にある英会話学校の先生になった。トルシーダの先生も始めた。トルシーダはほんとうにいろんなことをやってくれたし、第2の家族みたいなので、恩返ししたかった（トルシーダで日本語を教えていることは、[朝日新聞 2020] で紹介された）。どっちか選ばなけ

ればいけないと思い始めて、英会話の先生は、2019年8月に辞めた。

わたしはポルトガル語も日本語もできないと思っていた。母語がしっかりしていないと日本語も入らない。母語がちゃんとわかっている子は、日本語の入りかめっちゃ早い。EASの子たちには、わたしみたいにどっちに行ってもいいかわからなくなってほしくない。

前より残業が減って、収入も減って、ブラジルに送金する余裕がないとよく聞く。おばさんはブラジルに家を建ててビデオに撮っている。わたしの世代は、ブラジルに帰ることはあまり考えていない。ブラジルに家を建てるより、日本でバリバリ仕事をして、日本で暮らす。ブラジルに住みたいとは思わない。

6 4人のライフヒストリーからわかること

前潟さんのちょっとひょうきんなところもあって自治区の住民から慕われている感じ、藤田さんのおだやかでいつも人のことをおもいやっている感じ、久保田さんの子どもをたいせつにしているちゃきちゃきしたお母さんという感じ、山口さんの天真爛漫な感じを、ライフヒストリーの要約で伝えることはむずかしい。が、日本生まれ日本育ちの前潟さんと「日系人」3人との共通性、そして、藤田さん・久保田さん・山口さんの共通性と年代による相違は、見て取ることができる。

まず、共通性を指摘しよう。

前潟さんは、炭鉱の仕事がダメになって、知人や親せきの伝手で、何回か転職したのち、豊田市の自動車関連企業の工場で勤めるようになり、1976年に県営保見住宅に入居した。

久保田さんと山口さんは、「ブラジル人はすぐ転職する」と言ったし、実際、それが日系ブラジル人の特徴のひとつとして語られるが、よりよい職場や生活環境を求めて職を変えるのは、日系人(だけ)の特徴ではない。前潟さんと同様、久保田さんも山口さんのご両親も、転職・転居を重ねた。北海道にお住まいだった久保田さんのご両親が、炭鉱の仕事がダメになっ

てブラジルへ移住したという点にも、前潟さんとの共通点がうかがえる。産業構造の転換期に、転職を余儀なくされた方々にとっては、東京や大阪と同様に、ブラジルも選択肢だったのだ。

例外は藤田さんで、最初から小島プレスの系列会社に雇われ、保見団地内のURの社宅に住み、後に家族を呼び寄せて県営に移った。正社員への道が開かれていて、転職する必要がなかったという点で、幸運だったといえよう。最初から直接雇用に近い形で日本に移住した方がどのくらいおられるのかは、今後の課題である。

しかし、前潟さんと藤田さんの共通点もある。前潟さんが、次男の入園を機に、入居が始まって間もない、きれいな県営保見住宅に入居したのと同じように、藤田さんは家族を呼び寄せるのを機に、県営保見住宅に移った。1990年代に入ってからのことだから、時期は前潟さんとはだいぶ離れているが、希望に満ちた転居だったことはいかがえる。

保見団地は、自動車関連企業の労働者の受け皿として、機能し続けているのである。

久保田さんと山口さんは、自動車関連企業で働くために県営保見住宅に入居したわけではないが、1995年に入居した久保田さんは出産子育て期に入っての入居だったことがうかがえるし、2000年に入居した山口さんは「日本語の勉強をするために保見団地に引っ越したい」と両親に頼み、「保見団地にあこがれがあった」とまで語っている。

自治区長を務めた前潟さんは、ブラジル人が入居するようになって以降の望ましくない変化や自治区運営のむずかしさについても語っているが、入居する方にとって、保見団地は好ましい居住環境だと判断し、自ら望んで入居するところなのだ。もちろん、県営住宅には入居者の収入に上限が設けられているし、福祉施設として利用されているところもあるし、つらいできごとがあつてやむをえず転入した方もおられる。しかし、家族と暮らすための最善の住居として保見団地を選択された方がたくさんおられるという点は、強調しておきたい。

来日時期に関しては、藤田さんが1990年、久保田さんが1989年、山口さんのご両親が1990年で、ほぼ同じである。入管法の改正が1990年でそこから日系人の移住が増加したが、それ以前から、移住は始まっていた。藤田さんは職人を抱える会社を妻と経営していたし、久保田さんは皇族が宿泊するようなホテルに勤めていたが、そうした仕事を捨てるほどの経済的な魅力が、当時の日本にはあったのだ。

ブラジル生まれの藤田さんと久保田さんは、ブラジルの学校に通うと同時に、日本人会が運営する日本語学校にも通い、家では日本語を使っていた、という点でも共通している。藤田さんはおつれあいと天理教会で知り合ったし、山口さんのご両親が生長の家で出会われたということから、ブラジルにおける日系人コミュニティに日本の新宗教が大きな役割を果たしていることもうかがえる。年長の藤田さんの場合は、家で使っていた日本語が日本の日本語とは違っていて苦勞されたが、それでも、久保田さん同様、日本に来てから、日本語能力を活かして、病院の付き添いなどでブラジル人をサポートしてきた。

日本語とポルトガル語ができることが、日本での暮らしに役に立ったことはまちがいない。藤田さんにはお孫さんがいるし、久保田さんは今年の4月に下のお子さんも大学生になる。さまざまな苦勞を乗り越えて、日本でしっかり生き抜いてきた方々である。それでも、ブラジルへの思いを抱えておられる。藤田さんのお嬢さんはブラジルへ留学したし、ご本人は退職後にブラジルを訪問した。久保田さんは、大学生の娘さんと高校生の息子さんにポルトガル語を教えなかったことを「失敗」と語った。

言語の習得という点では、山口さんは、藤田さん・久保田さんとは大きく異なる。ご両親は日系二世で1990年に来日してから山口さんが生まれた。家では日本語を使用しており、日本の幼稚園に通った。しかし、卒園前にブラジルへ移住し、家でもポルトガル語を使用するようになった。(居住地の言語を習得してほしいという両親と祖父母の配慮だったのだと思う。) 小学校の先生がたまたま日系人だったということが幸運だった。中

学校の時に日本へ移住する。日本ではブラジル人学校に通った。日本語はすっかり忘れてしまっていたし、ご両親にはいずれはブラジルへ帰る、というお気持ちがあったからだ。山口さん自身も、進路について葛藤した。ブラジルへ戻って飲食店を開くつもりで、ブラジルの通信制の大学（こういう選択肢ができたことが若い日系人の特徴だ）で経営学の勉強を始めると同時に、トルシーダで日本語を勉強した。バイトをしつつ、通信制の大学で経営学や英語の勉強をしつつ、日本語の勉強もしてN1に合格した。本人は「勉強は好きじゃない」と言うが、猛烈に努力して、日本でもブラジルでも生きていける自己を確立したのだと思う。そして、子どもたちにはわたしのように迷ってほしくない、と願って、トルシーダのスタッフとして日本語を教える道を選択した。

ちなみにおつれあいとはEASで知り合い、今は、保見団地の近くで暮らしている。保見プロジェクトの主要メンバーのひとは、わたしと会っている時間より、山口さんという時間の方がはるかに長い。おかげで、ポルトガル語が上達し、昨年からは、県営保見住宅で燃えるごみを出す日の前日にお知らせの放送を週に2回、日本語とポルトガル語でやっている。ここで紹介させていただいた4人の方々にはほんとうにお世話になっているが、山口さんには特に、感謝している。

7 おわりに：アリにも感謝

保見団地にはたくましく暮らしている方々がいて、一緒に活動するのは楽しい、ということがご理解いただけただろうか？

本稿の3くらいまでの下書きは、保見団地プロジェクトにかかわる何人かの方にお読みいただき、ご意見をいただいて、大幅に修正した。思い違いや「研究の壁」を築いてしまっていたことに、気づかされた。心から感謝したい。ちょっとショックだったのは、当初から構想していた本稿の「オチ」を言い当てられてしまったことだ。くやしいが修正しようがないので、予定通りに記すことにする。「働きアリの法則」である。

働きアリのうち、よく働く2割のアリが8割の食料を集めてくる。
よく働いているアリと、普通に働いている（時々サボっている）アリと、ずっとサボっているアリの割合は、2:6:2になる。
よく働いているアリ2割を問引くと、残りの8割の中の2割がよく働くアリになり、全体としてはまた2:6:2の分担になる。
よく働いているアリだけを集めても、一部がサボりはじめ、やはり2:6:2に分かれる。
サボっているアリだけを集めると、一部が働きだし、やはり2:6:2に分かれる。

[Wikipedia「働きアリの法則」]

というものだ。市民活動に関わる人の中でこの「法則」が話題になったのは、10年ほど前のことだろう。癒しの話題だった。市民活動にかかわる人々は、日々「なんでうまくいかないんだろう」と追い込まれた気分が陥りがちだからだ。アリは、中学生の頃のわたしを救ってくれただけでなく、市民活動に関わる人たちも救ってくれた。あるいは、中学生の頃のわたしが勘違いしたように、何も考えていないわけではなくて、群れ全体／種全体の存続を「考えて」行動している、ということだ。アリにも感謝。

文献一覧

朝日新聞 2020「豊田の保見団地 日系ブラジル女性 学びなおした日本語 今度は同胞に（山口ジェシカ理絵さん）」(2020年6月30日)

Wikipedia 「日系ブラジル人」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E7%B3%BB%E3%83%96%E3%83%A9%E3%82%B8%E3%83%AB%E4%BA%BA> (2021年12月30日参照)

Wikipedia 「働きアリの法則」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%83%8D%E3%81%8D%E3%82%A2%E3%83%AA%E3%81%AE%E6%B3%95%E5%89%87> (2021年12月31日閲覧)

Escola Alegria de Saber ホームページ

[http://alegriadesaber.jp/index.php?option=com_content&view=article&id=25
&Itemid=28](http://alegriadesaber.jp/index.php?option=com_content&view=article&id=25&Itemid=28)（2021年9月5日閲覧）

大阪ボランティア協会 2020「特集 休眠預金等、活用制度大研究」『ウォロ』534

大谷 かがり 2007「助成研究 日系ブラジル人の子どもの健康を守る」『地域問題
研究』74: 2-9

大谷 かがり 2010「日系ブラジル人と日本人が「健康」をつくる：外国人医療支
援グループの活動を事例として」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』
11: 225-241

大谷 かがり 2012「リーマンショックによってブラジル人はどのようなことに困
難を感じているのか：豊田市保見団地でのフィールドワークから」『JICA 横浜
海外移住資料館研究紀要』7: 105-115

岡崎 広樹 2021「「隣近所の多文化共生」の課題：芝園団地の実態と実践から」
『PHP Policy Review』Vol.15-No.80: 1-17

金子 尚弘 2020「休眠預金活用法とNPO」<https://naohiro.biz/kyuuminyokin-2020/>
（2021年12月06日閲覧）

神原 ゆうこ 2021「市民活動という政治の場における道徳／倫理とその実践」『文
化人類学』86(2): 230-249

岸和田 仁 2011「前山 隆の『文学の心で人類学を生きる』を読む」『ブラジル特報』
1月号 <https://nipo-brasil.org/archives/2079/>（2021年12月30日閲覧）

Globab「glolab Magazine」<https://www.glolab.org/category/magazine/>（2021年
12月28日閲覧）

高齢者生協 ケアセンターほみ ホームページ

<https://aichikoreikyo.web.fc2.com/homigaoka.html>（2021年12月30日閲覧）

国立国会図書館 2009「第7章 日系社会の再統合から現在まで（1）」『ブラジル移
民の100年』https://www.ndl.go.jp/brasil/s7/s7_1.html（2021年9月5日閲覧）

小町 友樹 エベルチ 2013「在日ブラジル人の通信制大学について」愛知淑徳大学現
代社会研究科研究報告 9: 59-78

- 齊藤 尚文 2008「市民活動を書く：豊田市の外国人医療支援グループ」(共著者 大谷 かがり)松田 昇・小木曾 洋司・西山 哲郎・成 元哲 [編]『市民学の挑戦：支えあう市民の公共空間を求めて』梓出版社 pp. 186-209
- 齊藤 尚文 2018「10年後の市民学」『中京大学現代社科学部紀要』2017 特別号 pp.191- 204
- 齊藤 尚文 2021「中京大学現代社会学部における学芸員課程の展開」中京大学先端共同研究機構文化科学研究所博物館研究プロジェクト<編>『大学教育と博物館』 pp.5-19
- 齊藤 尚文・木下 莉那・鈴木 悠香子・山崎 永莉<編> 2011『2010年度社会調査実習報告書 第3巻 日本語支援教室「みよしっこクラブ」』52pp 中京大学現代社会学部 齊藤尚文研究室
- サンパウロ人文科学研究所 2021『多文化社会ブラジルにおける日系社会の実態調査』サンパウロ人文科学研究所(ダウンロード申請先 <https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdXfz7P2Lzq7Ehf9d4X2x2YQzSG1mdL0kFvpGoULKuqdBMtTA/viewform>)
- 静岡県 「ブラジルの教育制度」
<http://www.pref.shizuoka.jp/kenmin/km-160/documents/16brazil.pdf> (2021年9月5日閲覧)
- Japanese American National Museum, Los Angeles 「インタビュー ディスカバー・ニッケイ」<https://www.discovernikkei.org/ja/interviews/> (2021年12月30日閲覧)
- 新三河タイムス 2020「豊田市初 朝型子ども食堂 保見団地でNPO・学生 丸ごと包摂」(2020年10月29日)
- 高橋 幸春 2008『日系人の歴史を知ろう』岩波ジュニア新書
- 田中 真奈美 2021「サンフランシスコ・日系人の異文化適応の課題：ある長期滞在の日本人男性の語りから」『東京未来大学研究紀要』15: 111-119
- 中京大学 2019a「現代社会学部 内閣府、豊田市と連携し豊田市の地域課題解決に挑戦」<https://www.chukyo-u.ac.jp/news/2019/11/017129.html> (2021年12

月06日閲覧)

中京大学 2019b「現代社会学部 内閣府、豊田市との連携講義 中間発表会を実施」

<https://www.chukyo-u.ac.jp/news/2019/12/017222.html> (2021年12月06日
閲覧)

中京大学 2020「現代社会学部が内閣府、豊田市と連携し豊田市の地域課題解決に

向け最終発表を行う」<https://www.chukyo-u.ac.jp/news/2020/01/018133.html>
(2021年12月06日閲覧)

中京大学現代社会学部 2021「保見プロジェクト」

<https://www.chukyo-u.ac.jp/educate/gendaisyakai/pickup/pickup02.html>
(2021年12月06日閲覧)

中部圏地域創造ファンド (crcdf) 2021「多文化多様性の輝く保見団地プロジェク

ト」[https://www.crcdf.or.jp/9_kyumin yokin/5_2019_kusanone_shien/B_](https://www.crcdf.or.jp/9_kyumin yokin/5_2019_kusanone_shien/B_homi/B_homi_2020hokoku_2021.4.7.pdf)
[homi/B_homi_2020hokoku_2021.4.7.pdf](https://www.crcdf.or.jp/9_kyumin yokin/5_2019_kusanone_shien/B_homi/B_homi_2020hokoku_2021.4.7.pdf) (2021年12月06日閲覧)

都築 くるみ 1998「エスニック・コミュニティの形成と「共生」：豊田市H団地
の近年の展開から」『日本都市社会学会年報』16: 89-102

都築 くるみ 1999「外国人受け入れの責任主体に関する都市間比較：豊田市の事
例を中心に、大泉町、浜松市との比較から」『コミュニティ政策学紀要』2:
127-146

中尾 世治・斉藤 尚文 2018「斉藤尚文さんとの対話：ある人類学者の半生につ
いて(1)」『南山考人』46: 49-89 南山考古文化人類学研究会

中尾 世治・斉藤 尚文 2019「斉藤尚文さんとの対話－ある人類学者の半生につ
いて(2)」『南山考人』47: 35-56 南山考古文化人類学研究会

中尾 世治・斉藤 尚文 2021「斉藤尚文さんとの対話－ある人類学者の半生につ
いて(3)」『南山考人』49: 23-51 南山考古文化人類学研究会

中尾 世治・黒川 雛代・斉藤 尚文 2022「斉藤尚文さんとの対話－ある人類学
者の半生について(4)」『南山考人』第50号(刊行予定) 南山考古文化人類
学研究会

中澤 英利子 2018「ブラジルに帰国した日系人の子どもが語る移動の経験と日本

- 語学習：日系コミュニティとの関係性に着目して』『言語文化教育研究』16:
198-218
- 中東 靖恵 2018「ブラジル日系移民社会における「コロナ語」の位置」『岡山大学文学部紀要』70: 53-70
- 中村 有秀 2008「昭和三十六年八月二十四日 ブラジル移住に出発した三家族」『上富良野 郷土をさぐる』第25号
<https://www.town.kamifurano.hokkaido.jp/hp/saguru/2509nakamura.htm>
(2021年9月5日閲覧)
- 野中 モニカ 2020「日系ブラジル人からニッケイ日本人へ：ブラジル出身「日本人」帰国者の継承言語とアイデンティティについての事例」『天理大学人権問題研究室紀要』23: 1-13
- 樋口 直人 1998「在日ブラジル人と日系新宗教：ニューカマー外国人と宗教Ⅰ」『一橋研究』23(1): 161-173
<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/re/5734/kenkyu0230101610.pdf> (2021年9月5日閲覧)
- 細川 周平 2008『遠きにありてつくるもの：日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』みすず書房
- 保見アートプロジェクト (Facebook) 「保見アートプロジェクト Homi projeto de arte」<https://www.facebook.com/homipda/> (2021年12月06日閲覧)
- 保見ヶ丘国際交流センター ホームページ <http://homigaoka.jp/aboutus.htm>
(2021年12月30日閲覧)
- 堀端 みずき 1997「日系ブラジル人：そのライフヒストリーとアイデンティティの諸相」『調査季報（特集：市民の研究活動）』128: 11-15
- 松岡 秀明 2004『ブラジル人と日本宗教—世界救世教の布教と受容』弘文堂
- 宮本 英威 2014「責任と目標で生きる 青木智栄子さん ブルーツリー・ホテルズ&リゾート会長兼CEO」NIKKEI STYLE 2014/4/27
https://style.nikkei.com/article/DGXNASFE0101V_S4A420C1TY5000/ (2021年9月5日閲覧)

森 幸一 1998 「書評 前山隆著『エスニシティとブラジル日系人－文化人類学的研究』」『ラテンアメリカ研究年報』No.18: 150-160

山田 政信 2014a 「日本の新宗教の組織的展開 ②」『Glocal Tenri』Vol.15 No.10: 7+13

<https://www.tenri-u.ac.jp/topics/oyaken/q3tncs00000m9d7l-att/GT178-yamada.pdf> (2021年9月6日閲覧)

山田 政信 2014b 「新宗教のブラジル伝道 (20) 日本の新宗教の組織的展開 ④」『Glocal Tenri』Vol.15 No.12: 7

<https://www.tenri-u.ac.jp/topics/oyaken/q3tncs00000ox21d-att/GT180-Yamada.pdf> (2021年9月9日閲覧)

本稿は、NPOによる協働・連携構築事業「多文化多様性の輝く保見団地プロジェクト」、科学研究費（基盤研究（C）（一般））「外国にルーツを持つ子の親にとっての発達障害概念と子育て」（20K01199 代表：斉藤尚文）、および中京大学奨励研究費による研究成果の一部である。